

# 洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内  
洛友会  
〒606-8202  
京都市左京区田中大塚町49  
075-701-3210

## 九州における電気事業の あゆみと洛友会九州支部

九州支部長 岡 範彦 (昭35年卒)



九州で初めて電気のでりが点灯したのは長崎市で、明治19年長崎紡績所で照明用アーク灯を使ったといわれているが、九州初の電灯会社は、熊本電灯で、明治24年(1891年)開業した。これは、日本で初めて工部大学校でアーク灯が点灯した明治11年(1878年)3月25日から13年後、そして東京電灯が明治20年開業から4年後のことである。又、エジソンがニューヨークで電灯事業をはじめた10年後である。

熊本電灯は、全国で11番目の電灯会社で、設備は直流発電機125V20KW2台で供給を開始した。九州2番目は長崎電灯で、明治26年開業、1000V30KW交流発電機で、供給を開始した。次いで博多電灯が、明治30年開業、設備は国産初の交流発電機、田中製造所(現東芝)製で60KW2台であったが、明治33年にはWH社製120KW機を設置した。明治31年鹿児島電気開業、ペルトン水車でGE社製100KW交流発電機で、配電々圧3500Vは我国の高圧配電の始まりとされている。北九州地区では、若松電灯が明治31年、小倉電灯が明治33年に開業している。その後、需要に応じて発電設備容量を増大させるとともに、各地に設立された電灯会社を統合していった。

主要電灯会社についてその経緯をみると、熊本電灯は明治42年に熊本電気となり、博多電灯は明治44年、福沢桃介、松永安左工門等により設立された福博電気軌道と合併して博多電灯鉄道となり更に翌年九州電気と合併して九州電灯鉄道となった。設備は、火力1620KW水力1700KWであった。大正11年に名古屋電灯と合併して東邦電力となり、全国規模の電力会社となった。社長伊丹彌太郎、副社長松永安左工門であった。小倉電灯は、明治42年九州電気軌道等と合併し、電気事業と運輸事業を拡大していった。大分地区では、明治35年豊州電気鉄道が別府大分間で電鉄営業を開始した。これは九州初、全国で5番目の電鉄である。明治44年九州水力電気が設立され、前記会社や若松電灯等を合併し福岡地区へ事業拡大していった。鹿児島地区では、大正7年設立した日本水電が、川内川電気や南九州水力電気を合併して南九州地区に事業拡大していった。

これまでの発電設備は、明治24年熊本電灯の20KW直流発電機から単相交流発電機、明治27年三相交流発電機が採用され、以降三相交流発電機となった。出力は明治末には、1000KW機2000KW機、大正中期には10000KW機が出現している。又、周波数は明治30年頃までは100Hz125Hz、明治31年に鹿児島電気が60Hz、以降60Hz50Hzで、九州東半分が50Hz、西半分が60Hzで設備拡大していった。その後、昭和24年から35年にかけて60Hzに統一された。昭和14年には電力国家管理の時代となり、日本発送電が設立され、全国の主要な火力発電所、水力発電所、送電線、変電所が統合された。統合された電力会社は全国33社に及んだ。九州地区は日本発送電九州支店となった。

次いで配電統制が進められ、昭和17年4月九州配電が設立され、90%の供給を行っていた九州水力電気、九州電気(旧熊本電気)、東邦電力、日本水電の4社が統合された。残り47事業所が昭和18年2月までに統合されて九州全域に供給することになった。戦後、政府は電気事業再編成令及び公益事業令により、公益事業委員会を設置し電力事業再編成を実施した。委員長松本亟治、委員長代理松永安左工門であった。ここに日本発送電及び9配電会社は解散し、全国9地区に新会社が生じた。九州地区は昭和26年5月1日九州電力株式会社が創立され、発電、送電、配電を一貫経営する民有民営の公益事業が発足した。近年電力自由化が始まり、平成12年4月から2000KW以上平成16年4月から500KW以上平成17年4月からは50KW以上の需要家は電力供給者を自由に選べる競争の時代となった。洛友会九州支部は、昭和28年10月26日に設立された。これは同年2月鳥養会長がロータリーのガバナリーとして福岡にいられた時に、福岡在住の同窓生との昼食会が催され、会長から支部設立の要請があり、本部より一年遅れの発足となった。九州支部の初代支部長は、明治43年卒福井正治氏で、京大電気工学教室第10期卒業生である。明治43年はようやく九州各地で電気事業が始まった時代であり、九州の電気事業の黎明期から先輩方が活躍されたことになる。支部設立時の会員は80数名とあり、京大電気工学科創立以来、洛友会九州支部設立までの40余年間には、毎年2名程度の卒業生が九州で活躍されていたことになる。支部会員数はその後漸増して、現在は110名程度であるが、教室の卒業生数が多くなったことを考えると九州支部会員が少ないようである。もっと九州に来てもらいたいものである。支部会員は、電力、大学、電気・機械メーカー

等多方面にわたり、所在地は福岡地区6割でその他九州全県に広がっている。このことが、支部の行事も福岡で実施することになり、遠方からの参加を難しくしている。

支部行事は年1回の支部総会と年3回の昼食会または夕食会である。支部総会は例年5月の金曜日に近藤会長のご都合や他支部総会日等を勘案して決め福岡で実施。

参加者30名前後である。昼食会は昭和60年頃から、初めは不定期であったが、平成2年からは定例化し、8月、11月、2月の第4水曜日を基本としていたが、若い会員も出席し易い様に、8月は土曜日昼食会、11月は夕食会としたり

電気系教室懇話会のお知らせ

恒例の電気系教室懇話会を左記のとおり開催します。万障お繰り合わせの上、ご出席を賜りますようお願い申し上げます。

日時 平成16年10月22日(金) 15時から  
場所 電気総合館中講義室

一、講演会

- 15時00分～15時10分 学科長挨拶
- 15時10分～16時00分 田丸 啓吉先生(昭33年卒)
- 「LSIと40年」
- 16時15分～16時55分 衣川 清重氏(昭44年卒)
- 日立ディスプレイズ 技師長
- 「ディスプレイ技術及びディスプレイ産業の現状」
- 16時55分～17時35分 谷口 治人氏(昭48年卒)
- 電力中央研究所 システム技術研究所所長
- 「わが国の電力自由化と系統技術」
- 二、懇親会 生協吉田食堂(参加費1,000円)
- 18時00分

連絡先・電子工学専攻 鈴木 実(電話 075-383-2263)  
または電気工学専攻 大澤 靖治(電話 075-383-2257)

している。参加者は20名前後である。今後は、現在の行事を継続するとともに、何か、楽しく、現役会員も参加しやすいものを、会員皆様と相談したいと思っている。

会員寄稿

今世紀のエネルギー

前川 則夫(昭36年卒)

1. (はじめに)  
①これまで3回に分けて地球温暖化問題、エネルギーの安定確保や効率的な利用の現状、アジアを中心に爆発的に増加するエネルギー

問題などについて様々な観点から解説してきた。

②その中で筆者が指摘しておきたいのは化石燃料を将来世代と共有し、末永く利用しなければという倫理意識の希薄さ、将来の環境破壊による損失より現在世代の利益を優先し化石燃料が安価であれば利用するという人間の本性、を踏まえた対策が望まれるというポイントである。

③従って、地球温暖化対策の為に化石燃料の節約や効率的利用だけ呼びかけるのでは不十分であり、地球市民が使うエネルギーの多くを原子力と再生エネルギーにシフトすることが不可避である。今回はこれらの観点から解説し最終回としたい。

2. (今世紀のエネルギー問題の難しさ)

①世界のエネルギー使用量の増勢は勢いを増すばかりである。現在、先進国の人口は現在約10億人であるが、中国、インド、ロシア、ブラジル等の国々が追いかけ、世紀末までに30〜40億人が先進国の仲間入りをめざしてくるであろう。IEAの見通しでも2030年には世界のエネルギー使用量は現在の1.7倍、京都宣言の1.9倍になると想定している。

②世界の100年前のエネルギー消費と現在を比べると10倍以上の91億トン(石油換算・2000年)に達している。発展途上の多くの国々が先進国の仲間入りをしていく100年後のエネルギー消費量は

は莫大なものになるであろう。③エネルギーの安定確保は最重要課題である。石油は埋蔵量も偏在し、アラブという地政学的に不安定な地域にすべてを依存しているといっても過言ではない。また、化石燃料全般についても急増する世界需要の中でどのように確保して行くかという難問を抱え、国産エネルギー比率を高めることが喫緊の課題となっている。

④また、地球の温暖化が進行している実体を真摯に直視すれば、化石燃料の使用を現状レベル以下に極力抑えるべきと意見に対して反論はないはずである。しかしながら、一般にエネルギーの使用量は生活水準に比例して増加する。それ故、化石燃料の使用を前述の水準に抑えれば、先進国の人々も耐乏生活に追い込まれる。豊かさを享受している人々、現在は貧しいが先進国の仲間入りをめざしている人々、のいずれも、この政策を受け入れるとは到底思えない。ここにエネルギー問題の難しさがあらわ。

⑤この問題解決のキーは、節約と効率化を前提としつつ、増加するエネルギーの全量、あるいはそれ以上を原子力と再生エネルギーで賄い、豊かさを求める人々の期待に応えつつ、地球市民の同意を得ることではなからうか。

3. (巨大なエネルギー需要の事例)  
そこで如何にアジアのエネルギーの伸びが急速かつ巨大であるかの

事例として中国の電力需要を取り上げ説明しておくたい。

①中国では既に02年上半期には電力の不足が顕在化し、以降、四川、重慶、河南、湖北等停電の頻発への対応に追われている。中国の電力需要の伸びは00年から約10%と高い水準であり、需要が計画を大きく上回った。04年の中国の電力需要は約2000億kwh増の2兆910億kwh(日本の00年度の発電電力量は1兆915億kwh)に達する見込み。現在送電網の強化、発電設備の増強を進めているが05年も電力不足は避けられない見通し。

②中国では20年まで毎年2500万kwの新規発電所を建設していく計画だという。1970年代の我が国の電源ブームを思い出す。中国の電源設備は現在3億8000万kw、我が国の1.5倍。これが16年後には9億、EUの3倍、アメリカの規模に匹敵する。人口13億の中国国民が現在の欧米並みの生活を享受するとすれば15億kwを超えるとなつてもない数字。

③中国ではこの一環として20年までに28基の原子力発電の新設が計画されている。現在稼働中の原子力発電所は9基、建設中3基を含めて総出力880万kwであるが、20年までの16年間で原子力発電所の設備容量を3600万kw〜4000万kwに増やす見通し。

④エネルギー需要の伸びは、自動車、民生・産業部門でも同時に進行している。この動きは単に中国にとどまらず、インド、ブラジル

などの途上国に急拡大している。  
4. (何がクリーンなエネルギー源)

①炭酸ガス放出の観点からクリーンなエネルギーは何かについてそれぞれの立場の人が様々な発言している。例えば、天然ガスはクリーンだと言う。少し考えてみたい。②各種電源当たりのCO<sub>2</sub>排出量を比較して見る。石炭火力の場合を1とすると石油火力は0.76、LNG火力は0.62、太陽光0.054、原子力0.022となる。石炭と天然ガスを比べるとCO<sub>2</sub>の排出量は天然ガスの場合3割程度減る。確かに石炭と比較すればクリーンであるが、温暖化抑制の観点では原子力や太陽光とは比べものにならない。

5. (原子力の重要性)  
①現在世界で稼働中の原子炉の設備容量は3億6千6百万kw(01年)で1年間に石油換算6億7千万トンのエネルギーを生産し、二酸化炭素の発生量を約20億トン減らしている。

②現在日本で稼働中の原子力発電の設備容量は4千500万kw(03年・51基)で年間石油換算7千万トンのエネルギーを生産している。我が国のエネルギー自給率は6%という極めて低い水準。これを化石燃料から非化石燃料へシフトしながら自給率を50%程度まで高めることが将来のエネルギー不安や地球環境を考慮すると不可欠である。単国産エネルギーである原子力で全エネルギーの4分の1

を分担するとすれば現在の13%程度から、今後、原子力の設備容量を3千万kw程度増やし、稼働率をあげれば原子力の比率を25%に高めることは十分可能と思われる。

6. (再生エネルギー)  
①日本の総エネルギーの25%を原子力以外の非化石燃料である自然エネルギーが担う為には、水力等(6%)だけでなく、太陽光、風力等への設備投資の拡大が必要である。

②太陽光発電の限界潜在供給力(環境技術開発部会太陽エネルギー分科会の中間報告、97年)では、一戸住宅宅2600万戸に100%、その外に公共建物、業務用ビル、遊休地(道路・河川、空港等)に太陽光システムを設置したケースについて試算している。これらの場所について試算している。これらの場所について試算している。これらの場所について試算している。

③薄い太陽光エネルギーを集めるには前述の投資でようやく日本では年間消費する総エネルギーの13%(100万kw級原子力発電所30基)を賄えるに過ぎない。太陽光発電の場合は、原子力発電所の建設コストの少なく見積もっても2倍以上と言われており、また、夜・曇り・雨・晴れなどで左右される気ままな電源であり、電気は貯えられない為バックアップ電源を必要とする。それでも太陽光に一定の役割を期待する時代を迎えている。

④日本の風力の限界潜在供給力は、年間約89億kwとの試算もあり、日本の場合、補完エネルギーの域を出ず主力エネルギーにはなり得ないと言われている。

7. (米国における原子力への回帰の動き)  
①ブッシュ政権は10年頃までに6基(130万kw級など)の原子力発電所を新規に建設する計画を具体化しつつある。また、使用済み燃料の最終保管場所をネバダ州ヤッカ・マウンテン地区とする決定を下している。

②03年、MIT研究者グループは「原子力発電の将来」と題す報告書を公開。レポートの最大の関心事は地球温暖化問題である。今後、半世紀の米国と世界の炭酸ガスの放出量を推定し、温暖化緩和策として石炭火力から原子力発電への移行を強く提言している。米国では石炭火力発電の割合が52%を占めているという背景がある。MITグループでは想定した経済成長シナリオに基づき50年までに必要とする世界の原子力発電の基数を100万kw級で1000基から1500基としている。現在世界で運転中の原子力発電所は430基である。温暖化に本当に備えるならこれくらいの取り組みが求められる。

8. (文明の持続とエネルギー資源)  
①現在のウランの確認埋蔵量は約450万トンである。これを高速増殖炉でプルトニウムに転換して効率的に利用すれば、資源量は約50倍に拡大し、2000年の世界のエネルギー総使用量、石油換算約91億トンの数百年分のエネルギー供給が可能であり、未確認分を含めれば千年を超えるであろう。核不拡散、廃棄物についての国際的合意という難しい問題を抱えているが、それを乗り越えなければならぬ時期を迎えている。さらに、熱核融合炉が実用化されれば超長期のエネルギー供給が可能で夢のエネルギーの誕生となる。

②現代のように化石燃料を斧げ鷹のように食い散らせば、近い将来、資源の枯渇問題に直面するだけでなく、地球環境を破壊し文明の持続が困難になる。化石燃料の節約と効率的利用に心がけ、原子力と自然エネルギーで支える社会に構造転換を急ぐ必要がある。それ以外に、文明を持続させる方法を人類は持ち合わせていない。現代社会はこの貴重なウラン資源、即ち使用済み核燃料を廃棄物として扱い、教育している。残念なことである。

9. (再度温暖化リスクを考える)  
①今日のように化石燃料を湯水のように使い続けられれば、今世紀末には、インド洋のモルディブや南太平洋のフィジーなどは水没の危機が、また、北極点の真夏には氷が消える等の現象が現実のものとなる。また、世界の人口の50~70%が沿岸域に居住している。これら地域では海水位の上昇による水

没、雨量の増加による豪雨が引き起こす洪水など大規模災害のリスクはぐっと高まるものと予想される。  
②地球上の氷河は海水位を70mも上昇させる潜在力、換言すればリスクを有している。文明史に責任を持つなら小さな内に摘んでおきたいものである。  
10. (終わりに)  
①安全保障にとって石炭は埋蔵量も多く、生産地も世界に広がっているため、当面、都合の良い資源である。米国は石炭の利用、石炭起源の水素エネルギーを利用すれば将来にわたって自国の中で必要とするエネルギーを自国で確保出来ると考えている。中国も同様で石炭を需要に応じて使い続けるであろう。  
②石油・天然ガスは資源の量や偏在などの問題があるが、使い勝手が良いので各国とも入手可能な限り使い続けるであろう。日本もやはり温暖化リスクを意識しながらも、現実には入手可能な化石燃料を利用し続けられると思われる。前途多難である。  
③ウラン資源は化石燃料を上回るエネルギー資源である。化石燃料の代替をする為には高速増殖炉の開発は避けて通れない。  
④エネルギーの安全保障は現在世代にとって必要不可欠である。一方、現在世代が炭酸ガスを放出し、原因をせつせと積み上げて被害を受けるのは将来世代である。このように安全保障と温暖化問題と

は被害を受ける世代が異なる解決が極めて難しい問題である。温暖化問題は被害が顕在化した時には既に遅いが、原因の発生者は痛みを感じないから気楽に先送りする。「未来世代との道徳的共同体づくり」という人類がかって経験したことのない難題への挑戦でもある。

⑤解決の道としてエネルギーの使用が環境の許容限度に収まるように人類の活動を縮小均衡させる方法も考えられるが、国益や欲望の壁を乗り越えて推進するのは至難であろう。豊かさを支えるエネルギー政策に基軸を置かなければ地球市民の合意形成は難しいであろう。世界経済がエネルギー問題で天井を抑えられ、紛争の火種にならないようにする為には「原子力」と薄くて集めるのが困難ながらも尽きることはない「太陽エネルギー」をもっともっと大切にしていかなければならない。

⑥世界のトップランナーとして日本がこの課題解決を牽引することこそ日本に課せられた役割ではなからうか。

## 私の海外経験

安本 吉雄(昭49年卒)

京都大学には昭和45年に入學し、昭和51年に大学院を修了しました。既に28年以上経過しておりますが、疎水のほとりて飲んで騒いだ、京都大学の学生時代は遙か

昔のこととなりました。大学の4年生の卒業研究、大学院の2年間と通算3年間、川端昭先生にお世話になりました。量子エレクトロニクス講座ということで、ZnOの薄膜作成やその圧電効果を用いた表面波フィルターの作成など、今思いついてもかなりエキサイティングな分野であつたと思います。

大学院修了と同時に松下電器に入社しました。入社後は、全く別の分野の技術者としてスタートしました。テレビ受信機の回路屋としてスタートしたのですが、実は大学時代の研究と全く関係なかったのではなく、たまたま当時表面波フィルターがテレビの中間周波フィルターに使用され出した頃だった、という関係があつたかもしれません。当時は、テレビ受信機の回路が、トランジスタからアナログのICに置き換わる頃で、最初にやった仕事はこのアナログICの評価でした。

おかげさまでその後、アナログ・デジタルLSIの設計、画質評価、放送規格の提案、デジタル画像処理など幅広い技術分野と、さらには海外経験を積むことができました。実は、大学時代は英語の論文を読むことはあつても書くことはほとんどなく、ましてや会話をするなど皆無であつたのですから、不思議なものです。

入社してまだ日が浅い頃、たまたま米国の今言うベンチャー企

業から特許の売り込みがあり、それを検討した結果、上司と一緒に米国へ出張することになりました。上司は一足先に出発したので、その後を追いかけて一人で、ロサンゼルス機に乗り込みました。これが最初の海外出張でした。NYの空港に到着し、質問をされることなく税関をすり抜け、上司の顔を見たときには、本当にほっとしました。実は当時は全く英語の会話ができませんでした。

その後縁があつて、米国、欧州、シンガポールにおいて現地の技術者との交流を30年近く経験したことになります。今から振り返ってみると、日本の電機産業における技術の歴史を覗いて来たような気がします。

私が入社する前の時代になりましたが、1950年代から60年代は、ともかく「追いつけ、追い越せ」というスローガンの元、欧米の物まねで技術を習得していた時代で、がむしゃらに走ってきた時代であつたと思います。私たちの先輩の時代であります。実際、入社当時に、部長の話聞いたことがありますが、「RCAのテレビの回路図を入手するなり、ともかく実際に作ってみた。夜遅くまで頑張ったもんですよ。シャーケン、原理はわからない部分もあつたな。うまくいったので商品化したけどな」という話がありました。

1970年代から80年代は民

生用電機機器のような、日本の会社がひととおり技術を習得し終えた分野では優位に立ちました。ソフトウェアなど特定の分野ではまだまだということ、松下電器でも欧米を中心とした大学への留学制度が発足しました。

私の本格的な海外経験は米国が最初でした。これはこの海外留学制度にのつたもので、ロスアンゼルス Southern California) に1983年から2年間研究員として滞在し、コンピュータビジョンの研究をしました。当時は画像と画質に興味があつて、ここを選んだのですが、実はここで初めてインターネットを経験しました。すでに当時の米国の大学では、白人の学生は少なく、そこには中国や韓国から来た非常に優秀な留学生が大勢いました。

帰国後1987年ごろ、米国から新しいテレビの方式を検討する機運が出てきました。また欧州でも、新方式が検討されていきました。当時、松下電器はシリコンバレーに唯一の海外研究所がありました。が、米国のテレビの研究拠点は東海岸ということで、1990年になり、NJ州にAT&T(Advanced TV Laboratory)を設立しました。同じ頃、欧州でも現地でのプレゼンスが重要と、ドイツのフランクフルトに、PERDC(Panasonic European R&D Center)を設立し

ました。日本でも同様に、テレビの新規格の動きがありましたので、それにも参画しながら、米国とドイツの海外研究所の窓口となり、かなり頻繁に出張をこなしておりました。米国やドイツの技術者の気質もある程度理解していたように思います。

米国では、日本からの技術的な提案で少し納得がいかなかったりも、ともかくやってくるところがあります。ドイツではこれでは全くだめで、ほとんど日本からコントロールができません。

日本ではハイビジョンの開発と平行して、現行のテレビ方式の改良・改善もEDTV(Extended Definition TV)として検討されていきました。私はこれにも従事していたのですが、1994年までには一段落していました。その年の秋ごろ上司から突然呼び出され、シンガポールへ行けといわれ非常にショックでした。というのは、それまで欧米の研究所の窓口業務をしていましたが、アジア行つたことはありません。アジアの技術者はどういふものか、全くわからなかつたからです。

松下電器のシンガポールの研究所は1990年に設立されたもので、2代目の所長として、1995年、年明け早々に赴任しました。それから2000年まで、私はシンガポールの研究所の責任者としてシンガポールの技術者と深くつ

きあいました。

1990年代のいわゆる失われた10年は、日本の国際競争力がどんどん低下した時代でもありません。シンガポールでは今でも非常に高い国際競争力を誇っています。その理由のひとつを見たように、その一部は欧米まで流れていきま



アメリカ雑感

小嶋 唯司(昭54年卒)

15年以上前になるが、電力会社に入社後はじめてアメリカに研修のため5ヶ月ほど滞在した。こんなに長く外国に行ったことは初めてだったので、今でもいろいろと鮮烈な記憶がのこっている。今後行かれる方のご参考にでもなれば

(滞在場所)

5ヶ月というのは中途半端な長さで、ホテル住まいするのには費用がかかりすぎ、一人でアパートを借りるのは、光熱費や電話代等の支払いが面倒、ということでした。最初に泊めていただいたのはアメリカの語学学校から紹介された家庭。黒人街の真ん中で、最初タクシーで行くときにインド系の運転手から「あんなんでそんなところ行くんや。この前も近くでタクシーの運転手が殺されたんやで。わしほんとは行きたくないんやけど」と言われ顔が真っ青、胃が痛くなった。命あつての

お願いすることとした。外国にいて安全は第一、宿泊先は慎重に選ぶ必要がある。このためには伝を借りるなど十分情報を得てから決めることが大切。

(乗り物)

ワシントンD.C.を拠点にしていたのだが、ニューヨークと違って地下鉄は綺麗で安全だった。しかしバスに乗るのは一苦勞。日本でも同じだがはじめての地では路線が良くわからない。また乗っても車内放送はないし、どこを走っているのかわからない。停留所にも地名を書いていない。ということを目を皿のようにして外の景色を見る必要がある。明るいうちはいいが、暗くなったら乗り越えないよう要注意。

(車)

アメリカでは移動に車を良く使う。研修のために各地の電力会社を訪問するときにもレンタカーをよく使った。皆さんの想像どおりアメリカ車は日本車と比べて作りが良くない。何回か借りた中で、まだ新しいのにドアロックが動かなくなった、ワイパーのゴムがとれた等々いろいろ故障があった。またレンタカーなのに保険(のようなもの)が切れていて、警察に止められ切符を切られること1回。レンタカーといえども点

検をお忘れなく。自分の身は自分で守るのが基本。

(電気)

アメリカの電気の信頼度は日本の10倍以上悪い。だから停電も多いし、なかなか復旧しない。一度、竜巻のような嵐がきていたところの木が倒壊し、ホームステイ先が停電となった。日本の感覚だと長くても数時間で復旧すると思っていたら、一日たっても復旧しない。ちょうど初夏で気温も高かったのだが、そのうち電力会社が冷蔵庫のために氷を配りだした。そんなことをやるぐらいなら早く復旧しろと思ったが、結局復旧までに2日半かかった。こんなことはそんなに珍しいことではない。そう、向こうの方は平然としていた。手前味噌ですが日本の供給信頼度の高さを実感。

(人)

ある程度の期間を外国で滞在すると、いろいろと人付き合いがある。郵便局や銀行に行つて係員と話す機会があるが、彼らの愛想の悪さは相当なものである。客を客と思っていない節がある。また、ホテルの予約でも黙つていれば、一番高い部屋を紹介されたりする。こちらからもつと安いのではないかと、割引はないのかと言わないと、安い部屋を紹介してくれないことも多々あった。自己主張

の国であるからこちらも常に自己主張で対応。

(さいご)

日本も相当欧米化されているが、人種の違いは明らかであり、そこからくる物の考え方は今後も同じになることはないだろう。これを承知の上で対応すれば、人付き合いにおいて苦勞もそう感じないですむかもしれない。また反対に日本人にはない感覚が新鮮に見えたりする。若い方には機会があれば外国でカルチャーショックを受けることをぜひお勧めする。視野が広まること間違いなし。

私の宝物

中村 智和(平5年卒)

テーマフリーで原稿の依頼を受けてから、数日が経った。締め切りも迫っている。しかし、正直言つて、何を書いているのか、全くわからなかった。仕事の合間や風呂に入りながら少し考えたが、頭の中には全くネタが浮かんでこなかった。皆が関心あるような内容で原稿を書くこと意気込んだが、結局ダメだった。だから、私の生活の中心というか、私の宝物について書くことにした。それは1歳と1ヶ月になる愛息子だ。結婚して3年間、意識的に子供はつくらなかつた。月並みだが、

別に欲しいという感情もわいてこなかったし、しばらくは夫婦二人で生活しようと思っていたからだ。

結婚4年目に、周りからの圧力や将来を考えるとそろそろ、と思うようになった。そう思ったら、運良くすぐに授かった。実にあっけなかったというのが感想だ。親になるという実感もまるでなかった。妻のおなかが大きくなってきても、さほど変わらなかった。

でも産着につつまれた赤ん坊を見てからは、時間とともにジワジワと感動が大きくなった。退院のころには、かわいくて、かわいくて仕方がなかった。ひとつひとつの仕草が愛くるしいのだ。最初は女の子が欲しかった。男の子でよかったとがっかりした。でも性別なんて全く関係なかった。1ヶ月、2ヶ月と過ぎ、パパ似だ、ママ似だ、いや爺ちゃん似だなんていう数秒の、そしてたわいのない論争が繰り返された。(私は自分に似ていると思っっているのだが・・・)

生後8ヶ月の今年3月、これから、歩きだしたり、言葉をしゃべり始めたりするであろう矢先、私は東京へ転勤の辞令を受けた。妻が仕事をしていることもあり、サラリーマンの宿命とあきらめ、単身赴任することになった。断腸の

思いだった。

単身赴任も半年が経った。1、2週間毎にしか会えない現状だが、その間隔がいつそう、会ったときの喜びを大きくさせる。休日の2日は正ににつきかず離れず、べったりだ。

今は、この子が全てだ。この子なしの人生は考えられない。自分の子は本当にかわいいと思う。でも友人に写真なんかを見せても、そこまでかわいいと言ってくれない。理解できなかった。こんなにかわいいのに。でもどうやら、それは親が子を見る目のせいらしい。そうでもなければ、親は子を育てられないから。しかし、最近世の中には幼児虐待の問題が顕在化している。原因は様々であろうが、そんな人たちはわが子を一番かわいいと思わせる「まやかしの目」を持つていないのだろう。確かに子育ては大変である。寝不足にもなるし、自分の時間も持たなくなる。でも私の場合は、そんな苦労はわが子が見せるかわいさが払拭してくれる。まやかしの目を持っているおかげであろう。

最近、友人に言われた。親馬鹿が逆にならないようにと。最初は何のことかわからなかった。「バカ親」のことだった。気をつけよう、わが子のために。

### 支部だより

#### 中部支部総会報告

今年度の中部支部総会は、去る6月26日、名古屋駅前の名鉄グランドホテルにおいて開催しました。当日は本部より近藤文治会長、教室からは佐藤亨教授にご出席頂き、定時に始める事が出来ました。議事は前年度・今年度の事業報告、会計報告の決算及び案を全会一致で承認し、例年、秋に行われている「家族同伴秋の例会」は行き先を幹事に一任ということになりました。

総会に引き続き、近藤会長から洛友会の現状報告があり、会費納入者が40%に近づき、会の存続が危機状態であることを知り、一同静まりかえってしまいました。



佐藤教授からはプロジェクターを使って、桂キャンパスの現状を報告して頂きました。時計台の下が一般市民に開放されたフランス料理店「ラ・トゥール」始め、いろいろなレストランがあることを知り、今年の秋の例会は京都に行こうという声が一斉に上がり、時計台と桂キャンパスへ行くことに意見が一致しました。(その後、予約しようとした結果、時計台での昼食は出来ないことが分かり、幹事一同がっかりしています。)

引き続き自己紹介をし、総会最後を飾って学歌に代わり定例となっている「琵琶湖周航の歌」を合唱して、総会関連の行事を無事終了しました。

林 靖人(昭42年卒) 記

### 本部だより

#### 洛友会会則の一部改訂について

#### 会則の一部改訂

(平成16年5月)

(現行)

第8条 会長は会務を統括処理する。  
副会長は会長を補佐する。  
幹事は会長の指導の下に会務を処理する。

(下線部分のみ下記のとおり改訂)

(改訂)

第8条 会長は会務を統括処理する。  
副会長は会長を補佐する。  
2. 幹事は幹事会を組織し、役員会及び会長への提言を行うとともに会務を処理する。幹事会の長は幹事の互選による。

### 編集後記

平成16年5月29日に開催された本部総会において、別記のとおり会則の第8条を改訂する案が承認されました。

中秋を迎えましたが今夏の真夏日の多さと台風8ヶの上陸は記録的で大きな被害が発生しています。記録といえはイチローが84年ぶりとなる262本の年間最多安打達成のニュースに興奮した人も多いのではないのでしょうか。

前川則夫氏には4回に亘り「エネルギー」問題をご執筆有難うございました。原油価格が50\$を突破し、将来が気掛かりです。

### 訃報

講昭15 木下 喜一 16・3・29  
昭23 中野 英 15・11・  
以上の方々がご逝去なさいました。  
謹んで哀悼の意を表します。